

■ 米 12 月利上げを織り込む動き…

本日（21 日）の日本時間・未明に終了した FOMC の声明、参加メンバーらの経済・物価・金利見通し、イエレン FRB 議長の会見内容などは、いずれも市場のこれまでの想定よりはタカ派的なものであった。市場の見立て間違いと言ってしまうえばそれまでだが、結果としてドルに一段の見直し買いが入ることとなった事実は重い。そもそも、市場は非常によく間違える。

どうやら、FRB としては（余程のことがない限り）12 月の FOMC において追加利上げ実施の決定を下すことを、今のうちから織り込んでおいてほしいという構えのようである。今回の FOMC の声明にもあったように、確かに足下のインフレ率はなおも低調と言える。とはいえ、イエレン議長が述べているように、目下の低インフレは必ずしも経済全体を反映していない。

たとえば、このところの米株価の値動きは少々異常とも言えるほどの上げぶりである。昨日（20 日）の NY ダウ平均は 9 日続伸し、7 日連続で史上最高値を更新した。これは、誰が何と言おうと“完全にバブル”である。量的緩和（QE）で 4.5 兆ドルもカネをばら撒いて、結果、何らかのバブル的現象が生じないわけではないのである。

また、物価動向やインフレの現状を量るための指標・データのとり方に、なおも難がある可能性は否定できない。日本でもそうだが、以前から用いられている物価指数などのデータよりも日々の生活の中で実感する物価上昇の感覚、負担感の方がはるかに大きい。

そう言えば、一昨日（19 日）発表された日本の基準地価によると、東京・銀座はバブル期の価格を 26 年ぶりに更新したという。一方では、ここにきて新興国の株式市場が相次いで過去最高値を更新している。何やら、今では世界全体がバブルの様相を呈し始めてきている模様だ。日本や新興国などがバブルに沸いている（個々に実感しているかどうかは別の話）なか、米国だけは例外ということもなからう。まして、いまだに米国の金融政策は「正常化」の道筋を歩み始めたばかりであり、どう考えても「引き締め」と呼ぶには程遠い。よって、年内にもう一回、来年（2018 年）は大よそ 3 回の利上げが行われるとの見立てに違和感はない。

10 月の声が聴かれる頃になれば、いよいよ次期 FRB 議長候補の話題も本宅的に取り沙汰されるようになる。いまのところ、まったくの未知数だが、イエレン氏以外は総じてイエレン氏よりもタカ派的な志向を掲げる候補者が多いとされる。

思えば、リーマン・ショック以降、これまで世界経済を危機的状況から救ってきた人々というのは、BOE のキング前総裁にはじまり、FRB のバーナンキ前議長、フィッシャー前副議長、そして ECB のドラギ現総裁と、いずれもが皆、同じマサチューセッツ工科大学（MIT）経済学部出身者たち＝俗に言う「MIT 人脈の一員」である。ちなみに、FRB のイエレン現議長は MIT 出身ではないが、夫のアカレフ氏は MIT 出身のノーベル経済学賞受賞者である。

そして、このほどフィッシャー氏は先んじて辞任表明し、イエレン氏も来年 2 月に任期満了のときを迎える。ちなみに、次期 FRB 議長候補者のなかには MIT 人脈の一員と思しき人物はいない。つまり、次期 FRB 議長がイエレン氏以外の人物になると、ようやく“リーマン・ショック後”が終わったというイメージになる。それは、平たく言ってしまうと「超ハト派」から「タカ派」へのスイッチでもあると考えられる。

ときに、このところの急激なドル買い戻しの流れによって、ドル/円は実に様々で重要な節目をいくつも上抜ける動きとなった。まず、先週の週足は一目均衡表の週足「雲」下限と 62 週線を上抜け、さらに今週の週足は 31 週線と週足「雲」上限を上抜けた。

日足については、まず先週 15 日に日足「雲」下限を上抜け、今週 18 日には 89 日線、20 日には日足「雲」上限を上抜け、本日（21 日）は 200 日線をも上抜ける動きとなっている。

もちろん、あまりの急ピッチな上げに対する目先の警戒感是一段と強まってきている。FOMC 通過後（本日）のアジアと欧州は、あらためて結果を織り込もうとするだろうが、NY 時間あたりから一旦利益確定の動きが見られる可能性もあろう。その点は、やや警戒と言える。

（09 月 21 日 12：20）